

## 2024 年度総会開催—「菜宴」にて

奈良日仏協会の 2024 年度総会を、2 月 11 日（日・祝）、「菜宴」（奈良市小西町）において開催しました。出席者 18 名、委任状 46 名、合計 64 名で、現時点会員総数 91 名の過半数を越えており、会則第 23 条の規定により総会の決議に十分な数となり総会が成立したことを確認。その後、三野会長を議長に議事が進められ、次のとおり議案が承認されました。1) 2023 年度活動報告、2) 2023 年度決算報告、3) 2023 年度会計監査報告、4) 2024 年度役員選出、5) 2024 年度活動計画、6) 2024 年度予算。

2023 年度活動報告では、コロナ 5 類への移行に伴い、ほぼコロナ以前の形に戻り、理事会の定期開催のほか、交流活動 3 回、フランス・アラカルト 3 回、シネ・クラブ 3 回、ガイドクラブ、美術クラブ、秋の教養講座を各 1 回実施。会報誌 Mon Nara、Mon Nara 通信の順調な発行が報告されました。2023 年度決算は、前年度からの繰越金 1,546,021 円をベースに、今期の収入 361,882 円、支出 353,516 円の結果、次年度繰越金額が 1,554,387 円となったことが報告され、三木監事より、証票がきちんと整理され正しく会計処理がされているとの監査報告がなされました。

2024 年度役員選出では、オリヴィエ・ジャメ副会長の逝去、南城守理事の退任の報告があり、会長：三野博司、副会長：浅井直子、事務局長：杉谷健治、理事：藤村久美子、中辻純子、高松洋子（会計）、喜多幸子、藪田章恵、監事：三木正義、顧問：坂本成彦、の陣容で取り組むことが承認されました。

2024 年度の計画としては、これまでどおり日仏文化交流と会員相互の親睦という二つの大きな柱を軸に活動し、協会創立 30 周年を迎えるにあたり記念行事を実施するほか、文化事業は、例年同様の回数予定を組み、これに伴う新年度予算が了承されました。（決算、予算の詳細については、折込別紙をご参照ください）。総会の終了後、浅井副会長より、ジャメ副会長、中浦東洋司会員両名のご逝去に関して報告があり、全員で黙祷を行ないました。

その後の 4 年ぶりとなる飲食を伴う懇親会では、宇陀市で古民家再生プロジェクトに携わるフランス人 4 名、東京から参加の神澤会員はじめ、28 名が集いました。三野会長の開会挨拶に続いて、

二本のフルーツによるミニコンサートがあり、その後、坂本前会長の乾杯の音頭とともに、宴会の部がスタート。参加者の皆さんによる自己紹介や近況報告で盛り上がり、片言フランス語がまじったり、「私たちに明日はない（今を生きましよう）」発言が飛び出したりするなど、コロナ前の賑やかな宴席が復活しました。（事務局）

### 《 三野会長 2024 年度あいさつ 》

奈良日仏協会は 1994 年以來、日仏交流の文化活動を堅実に進めてまいりました。本年創立 30 周年を迎え、理事の皆さんと記念企画の準備を始めております。詳細が決定すれば、Mon Nara 誌上でお知らせ致します。私は 5 代目の会長として 2014 年に就任して以来、20 周年および 25 周年記念事業に関わってまいりました。Jules Renard ジュール・ルナール (1864-1910) の『Histoires Naturelles 博物誌』(1896) には 110 の項目がありますが、その 44 番目は「Le Serpent 蛇」です。この項目の II は、「La dix millionième partie du quart du méridien terrestre 子午線の 4 分の 1 の 1000 万分の 1 の長さ」（すなわち 1 メートル）とありますが、I のほうが有名です。そこには「Trop long 長すぎる」とだけ書かれています。会長 11 年目に入りますが、Trop long という印象をもたれないよう努めます。皆様のご支援をお願い致します。



《事務局からのお願い》 会員名簿を更新する時期になりました。記載事項に変更のある方は 3 月 31 日までに、下記のいずれかの方法で変更内容をお届けください。1) Mail : sugitani@kcn.jp 2) FAX : 0742-62-1741 3) 郵送 : 〒630-0224 生駒市萩の台 3-2-13 杉谷方 奈良日仏協会事務局 ※ お名前以外の掲載事項は自由に選択することができますので、掲載項目を変更したい方はその旨ご連絡お願いいたします。

## フルートデュオ（花室知佐&齊藤舞歌）の演奏

### 【演奏曲目】

1. G.ビゼー：歌劇「カルメン」より（I.III.V）
2. 石田一郎：Pastorale（牧歌）
3. J.フランセ：2羽のオウムの対話（I.V.VI）
4. W.A.モーツァルト：フルートカルテットニ長調



2024年奈良日仏協会の総会後の懇親会にて、フルートデュオで演奏させていただきました。今回齊藤舞歌さんとご一緒させていただき、真っ先にフランスものの曲（J.ビゼー、J.フランセ）に取り掛かりました。フランセは流石に大変でしたが、新古典主義音楽の世界を楽しんでいただきました。石田一郎さんの牧歌も新鮮で、私達2人の仲も深まっていくような曲でした。

モーツァルトの曲は短調が殆どなく、長調も抽象的な表現が殆どで、デュオのフルートカルテットで聴き手の心情に寄り添う演奏は難しかったです、感慨深い時間でした。懇親会はどこか和んだ雰囲気の中、フランス人の方々もいらっちゃって、日仏交流の場で演奏させていただけることをとてもありがたく思っていました。お食事までご馳走になり、大変貴重なお時間をありがとうございました。（花室知佐）

## 総会・懇親会に参加して

◆◆◆伝統からリノベーションへの懇親会：総会では今秋の30周年イベントに期待しつつ、懇親会は迫力のあるフルート二重奏でスタート。アンコール曲まで聴けずちょっぴり残念。その後、個性あふれる参加者のトークと美味しい料理であつという間にお開き。特別ゲストに宇陀市で古民家をリノベーションしゲストハウスを開設する夢に向かって邁進するフランスの若者たち。まさに奈良日仏協会の歴史と伝統、そしてリノベーションする若者というイノベーションが融合する素敵な機会でした。（林薫子）

◆◆◆今回初めて総会と懇親会に参加させていただきました。フルート演奏のカルメン、とてもよかったです。会員の皆様のお話も盛り上がり楽しかったです。私は大阪に住んでいますが、フランス語がご縁で奈良の地につながりを持つことができ、嬉しく思っています。奈良日仏協会は今年、創立30周年を迎えるのですね。日仏文化交流を通して、これからもよき出会いがありますように、願っています。（小原千賀子）

◆◆◆コロナ後初の食事付き懇親会は、フルート二重奏の素敵な生演奏の後に美味しいお料理とワインで経験豊かな皆さんと会話が弾みました。自己紹介のお話を聞いてお話をもっと聞きたくなるばかりでしたが時間が足りず次回のお楽しみになりました。宇陀の古民家再生を手がける4人のフランス人の若者との出会いも楽しかったです。元々古民家再生民泊事業にとっても興味がありましたので、彼らのプロジェクトをぜひ拝見したいと思います。海外から来た若者を皆で暖かく迎える素敵な会でした。（森岡由紀子）

◆◆◆私たちがレストランに入ると、すでにたくさんの人が来ていることに驚きました。歓迎は温かく、私たちはテーブルに通されました。次に何が起こるか予想もしていませんでした。とても上手なフランス語を話す人がたくさんいました。フルートのミニコンサートも驚きで、新しいメロディーを発見したり、生でクラシックを聴くことができ、とても心地よく楽しかったです。最初の料理が到着したとき、私は日本語で各人の話を理解しようと最善を尽くしましたが、私のレベルは非常に低いです。幸運にもフランス語を話せる人たちがいて、とても上手な発音で私たちを驚かせてくれました。食事も美味しく楽しかったのですが、それ以上に協会の皆さんとの交流がとても楽しかったです！それが30年も続いているというから驚きです！ご招待にとても感謝しています。とても楽しい時間を過ごさせていただき、日本とフランスの関係をよりよくしてくださり、ありがとうございました！（シャルリ・メルシエ：宇陀で古民家再生プロジェクトに携わるフランス人4名を代表して）

## 2023 年度秋の教養講座「赤木睦代さん講演会」(11/23) 報告

◆◆11月23日(祝・土)、画家の赤木睦代さんを講師にお迎えして、生駒市コミュニティーセンター会議室にて講演会(25名参加)、フレンチ・レストラン「ア・ヴォートル・サンテ」にて懇親会(21名参加)が開催されました。周囲の人たちを自然に幸せな気持ちにしてしまう赤木さん、今年はサンティアゴでの個展に30名もの団体を引率していられるそうです。また新たな道が拓かれていくことでしょう。ずっと応援しています!(浅井直子)

◆◆赤木さんの素朴で気取らない話しぶり、描かれている牛の力強さ、熊野本宮大社や上賀茂神社という神聖な空間、牛自体の持つ聖性が響きあうような時間でした。画家には、生に向かうタイプと死に向かうタイプと二つがあり、自分は生に向かう方だと話されていましたが、頷けます。一途に牛を描いているうちに、赤木さんが牛と同化してしまったかのような錯覚も抱きました。懇親会ではほろ酔いに。昼間のお酒もいいものですね。(杉谷健治)

◆◆私は「牛」に触れたことがない。でもこの動物を、私たちはずっと見つづけてきた。ここにもそういう画家がいた。赤木さんのキャンバスには、紀州田辺の奇岩ごつごつの海端で金色の陽を浴びて動かぬ姿があった。この「牛」はじつに神話である。圧巻の「十牛図」では「牛」は十枚の扇面に、禅の解脱の理想を体現していた。また、頭部だけのアップで、グッと力んだその烈しい表情の一枚があった。「牛のまなこにあつめたる力燃ゆるなり・野村朱鱗洞」と日頃の愛誦句が重なってきた。これら、絵の中の牛が湛える様々な表情や雰囲気には、牛そのものの存在感とともに、「牛」をそのように理解し、描いた人の内面も表れている。講演では、語り口や表情からあふれてくる画家の豊かな人間性がステキだった。何よりご自身が豊かな「生命体」なのだった。(泉悦子)

◆◆まず赤木さんの明るさ、元気さに驚きました。芸術家は気難しいという私の偏見を、赤木さんはみごと吹き飛ばしてくれました。奇しくも城陽という私の住む町の中学校で40年近くも美術教員を勤められたのですから、「健全な精神と頑強な体力」が必要です。その様子は見せてもらった動画でよくわかりました。やんちゃ坊主たちが目を輝かせ、授業に乗ってきていました。私もこんな美術の授業を受けたかったなあ、とうらやみました。赤木さんは牛にこだわる画家です。それも頭部と胸部をクローズアップして描きます。たくましい、それでいてやさしい黒牛です。これはおそらく赤木さんの故郷紀伊田辺での原風景でしょう。赤木さんは紀州にもこだわります。キャンバス代わりに紀州板。一昨年熊野本宮で個展も開きました。そんな彼女の紀州愛、城陽愛、パリ留学体験などを、巧まぬ話術と適切な動画やスライドで語り、私たち聴衆を幸せな気分してくれました。(山本邦彦)

◆◆教養講座の前日、講座で展示していただく作品をご自宅に受け取りに行った折、教師と画家としての活動についてお話を伺い、飾らないお人柄と驚くようなバイタリティーに私はすっかり魅了されました。教養講座当日には数々の作品を至近距離で拝見できましたが、きれいな色や輝きに満ちて明るくエネルギーを放つ絵に、私の目はくぎ付けになりました。そしてパリでの留学生活や、各地での個展、これまでの絵画活動、今後の活動について楽しいお話をうかがいました。この講座に参加された方はきっと、私同様に赤木さんの大ファンになられたのではないかと思います。(喜多幸子)



◆◆◆秋の教養講座にてたくさんの会員の方にご清聴いただきありがとうございました。講演をご依頼いただいたおかげでフランス・パリの留学先(エコール・デ・ボザール)の卒業生の偉大さを再確認でき、自分にとってとても意義深いものになりました。「道の世界遺産」登録20周年記念・熊野古道を描いた作品と「十牛図」の作品もみていただくことができました。懇親会では、講演及び作品についての感想をいただき、今後の活動の糧になるようないろいろな話を聞くことができ、充実した時間を過ごすことができました。ある会員の方が「赤木先生に中学校の時美術を教えてもらっていたら美術を好きになったかも」と言ってくださったのが一番うれしかったです。和歌山県田辺市・サンティアゴ市観光協定10周年を記念して、在スペイン日本国大使館・田辺市の後援のもと今年5/9~5/13にスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラで個展を開催します。7/2~7/17に帰国展を六本木の駐日スペイン大使館で行うことになりました。新たな境地を目指してさらに精進してまいります。いつかルーブル美術館で個展することを夢見て100歳まで描き続けたいと思います。(赤木睦代)



## ガイドクラブ「会津八一の歌碑をたずねて」(10/22) 報告

◆◆会津八一は19歳の時に、新派の句について「其調子即ち音楽美を顧みざるは確かに一失なり。」と評している。講演会では、柏木先生が、国語の先生は歌の背景、状況の説明はしても、歌そのものがよくできていることを説明しないとおっしゃっていた。フランスでは、授業で *explication de texte* があり、詩の成り立つ要素としての音や韻について、必ず教えるらしい。八一が唐招提寺を詠んだ歌「おほてらの まろきはしらの つきかげをつちにふみつつものをこそおもへ」では、オ音、ウ音が使われている。この2つの音は鈍く重い意味を持ち、ツ音はつつーっと走らすイメージがあるとのこと。声に出すとその調べによって、生き生きとして情景が目に見え、歌をより豊かなものにしてくれる。先生から、また「まろきはしら」とはエンタシスのことで、現在、唐招提寺を目の前にしながら、同時に古代ギリシアへも思いを馳せる、時空との対比を使った歌であるという説明を受けて、歌の深さに感動した。(菌田章恵)

◆◆講演を聴き、会津八一にグイグイ惹かれていった。「そもそも詩(ポエジー)とは何ものたるや・・・音楽美ではないか」の考えに共鳴したのだ。紹介された名歌の中から特に朗唱したい三首「百済観音」―ほほゑみて うつつごころに ありたすく だらほとけに しくものぞなき―「救世観音」―あめつちに われひとりゐて たつごとき このさびしさを きみはほほゑむ― この二首からはさびしさが沁みってくる。それは単なる感傷的な孤独感からではない。先生は「孤絶」という語で示された。有限の命をもつ生き物の存在の本質から生じる寂寥感だ。それでも微笑を浮かべてすくと立つ古仏の真実をとらえた秀歌に救われる思いがするのはなぜだろう。「唐招提寺」―おほてらの まろきはしらの つきかげをつちにふみつつものをこそおもへ―ギリシャ神殿がオーバーラップする。O母音の悠揚とした調べで深い物思いへと誘われていく。何と豊潤なポエジーの世界であることか。講演の余韻の中を歌碑巡りへ。「私の散歩コースです」とおっしゃる三野先生に導かれていく。歌碑は境内の奥に、玉砂利道の傍らにひっそりとあった。古都の残り香を愛した歌人にふさわしい。日没、猿沢池は秋の黄昏の色を映していた。奈良にすっかり魅了される一日であった。(小林安貴子)

◆◆西大寺に転居したのは2001年の初夏でした。それまでも2度ほど訪れて、その深い緑が作り出す時間を越えた静寂にたたずむ秋篠寺が、このときからきわめて身近なものとなり、私の散歩コースに組み込まれました。いつも南門から寺内に入りますが、すぐ左手に会津八一の歌碑がすく立って迎えてくれます。とはいえ、八一のことは、むかし奈良県立美術館で開催された「会津八一、奈良の寺と仏像」展、新潟大学での仏文学会の折に訪れた「会津八一記念館」以外はあまり知りませんでした。2023年4月、津市で開催された三重日仏協会主催の第22回柏木隆雄文芸講演会「会津八一と吉野秀雄、奈良の古寺・仏像をどう詠んだか」を聞いて、ぜひ奈良でも、しかも歌碑の散策付きで実現したい、と柏木さんをお願いしたところ快諾していただきました。三重のときからさらに練り上げられた感銘深い講演と、爽快な晴天のもとでの歌碑巡り、充実した秋の一日でした。(三野博司)

◆◆今回話題にした会津八一と吉野秀雄の話。巡る歌碑の歌について新解を施して、これは私自身も結構満足している。一般に日本では歌の意味を一通り述べて、後はその歌の由来や作者について述べ、その歌が「どうして良い歌か」「音韻はどう響くように仕掛けがあるか」など、歌そのものの評価に本来つながるべき個所については、「名歌」と一言で片づけて深い分析をしない(できない?)ことが多い。フランスでは *Explication de texte* と言って小学生から一つの文章の構成や文の一つ一つについての解釈を、単なる語句でなく論理的に分析することを重んじる。この方法をもってすれば短歌もまた新しい魅力を発見することができるはずだ。自分の目と知識で31文字に挑戦するのはまことに楽しい。私は新聞紙上に毎日溢れる選評の余りに情緒的で、何の文体的分析も無いことにあきれ果てている。それにしても歌碑巡りは愉快で、得ること多かった。何度も行き来していた場所の思いがけないところに歌碑があって自分の迂闊にあきれ果てた。歌碑を立てる人や周辺も、もう少し歌の解説(単なる情緒的なものでなく)や由来を述べる説明があればと思う。それぞれの場所のそれぞれの歌碑のたたずまいと書蹟。まことに贅沢な半日を味わわせていただいた。改めてご準備頂いた皆様、ご同行頂いた方々に感謝を捧げたい。(柏木隆雄)



## 第61回奈良日仏シネクラブ例会（10/29）報告

◆◆一昨年秋からシネクラブに参加するようになり、ジャック・ドゥミ監督の映画はこれまで3作品を鑑賞しました。『ローラ』『シェルブールの雨傘』『ロシュフォールの恋人たち』はドゥミ港町三部作と言われ、主題が互いに関連をもっているということを知りました。『シェルブールの雨傘』は若かりし頃に観たのですが、主題歌はミッシェル・ルグラン作曲、主演女優のカトリーヌ・ドヌーブの美しいミュージカル映画だったという記憶しかなく、監督は名前すら知りませんでした。今回の『ロシュフォールの恋人たち』は観たことはなかったのですが、挿入歌の「キャラバン隊の到着」は、今でも何故かメロディーが口をついて出てきます。ミッシェル・ルグランが1970年代当時何度も来日して演奏していたこともあって、この印象的で軽快な曲を何度も聴いていたからでしょうか。さてこの映画を観ての感想は、とにかく美しい！！に尽きます。ロシュフォールのカラフルな街並み、お洒落なカフェ、エレガントでキュートな双子姉妹、華やかな音楽とダンス、エスプリのきいた会話…これぞフレンチ・ミュージカルであり、やはりアメリカン・ミュージカルとは違います。鑑賞後に配布資料を読むと、「あの行動」「あの台詞」「謎の登場人物」etc.の意味がわかったような気がして、ますます映画が面白くなるのを実感しています。(鈴木まゆみ)

◆◆シネクラブでは、リアルタイムで鑑賞することが出来なかったフランス映画、名監督や著名な俳優たちの代表作が解説付きで紹介され、参加者の方々の個性豊かな感想が伺えるので、毎回楽しみにしている。だが今回の『ロシュフォールの恋人たち』については、フランスのミュージカル映画鑑賞というよりはむしろ、粋でお洒落なフランス語の台詞や歌詞を聞き取ること、日本語字幕を読み取ることに集中して、「フランス語を勉強しよう」という気持ちが先行してしまったような気がする。なぜだろうかと考えてみると、『キャッツ』や『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』『ミス・サイゴン』など舞台上の傑作ミュージカルがロンドンのウェスト・エンド、ニューヨークのブロードウェイから次々に世界に発信されていった時代に、学生の語学研修旅行の引率、学会、個人的な海外旅行などで英国を訪れ、これらの舞台を現場で鑑賞した時のことが、ミュージカル映画を観ているうちに生き生きと蘇ってきたからだと思う。あの時の迫力、臨場感、感動の余韻は今も鮮明に残っている。不意打ちのようにしているようなことを思い出させてくれる、これも映画のもつ力だろうか。(長谷川明子)

◆◆『ロシュフォールの恋人たち』で久しぶりに楽しいミュージカル映画を観ることができました。「運命の人と巡り合う」という物語の展開でしたが、出演俳優の方たちのダンスがとても素晴らしかったです。映画を観ながら音楽を聴くというのも楽しみのひとつです。さいごに出演者やスタッフのエンディングロールが消えてからも音楽だけがしばらく流れていて、集中して音楽を聴くことができたのもよかったです。(山岸多賀子)



### 第62回日仏シネクラブ例会案内：ジャック・ドゥミ特集④『思い出のマルセイユ』

- ❖ 日時：2024年2月25日（日）13:30～17:00
- ❖ 会場：奈良市西部公民館5階視聴覚室
- ❖ プログラム：『思い出のマルセイユ』（Trois Places pour le 26, 1988, 103 分）
- ❖ 監督：ジャック・ドゥミ
- ❖ 参加費：会員 200 円、一般 300 円
- ❖ 問い合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 070-1731-0230（浅井）
- ❖ 予約不要
- ❖ 映画はイヴ・モンタンがミュージカル公演に出演するために故郷のマルセイユ駅に到着するところから始まる。冒頭、駅の階段でモンタンが歌って踊る群舞が魅力的。初老のモンタンには、長年歌手・俳優としてキャリアを積んできたスターにしか出せない枯れた味わいと優雅さがただよっている。自身の歩んできた人生を歌と踊りで振りかえる公演のために帰郷したモンタンですが、その舞台裏ではかつての恋人と再会し自分には娘がいたことを知らされる。ドゥミの作品におなじみの男女の出会い・別れ・すれ違い・再会・再出発の劇が、実人生と芝居が交錯しながらくり広げられる。様々な偶然に翻弄され、ほろ苦さを味わいながらも生きていく人物たち。モンタンはマルセイユでの公演を終えると次の場所での公演へと旅立つ。人生は旅であり、旅は人生そのものでもある。本作品はドゥミの遺作となった。



宇陀で古民家修復に携わるフランス人グループ シャルリ・メルシエ

Nous sommes un groupe d'amis composé de Thomas, Coline, Grégoire et moi (Charlie). Coline ma belle-sœur (mariée à mon grand frère) a acheté une "kominka" à Utanofuruichiba et nous l'aidons à rénover. Nous avons commencé depuis notre arrivée le 31 août, nous avons fait pleins de travaux, mais il en reste beaucoup. Aussi, nous avons participé à des activités locales. Le Matsuri de Utano et le Tondo du quartier voisin.

Malgré notre niveau débutant de la langue japonaise, l'accueil et les interactions avec les Japonais sont toujours agréables et chaleureuses. Même si nous ne parlons pas très bien, chaque échange est un plaisir. Pour le moment nous avons visité Osaka, Tokyo et une petite partie de Shimoda. Nous aimerions visiter plus, mais la "kominka" demande beaucoup de travail et de temps. De mon côté, je me déplace et donne des cours d'anglais le mercredi à des personnes qui souhaitent apprendre. Il y a encore beaucoup à voir et à faire, j'ai hâte de voir la suite ! (Mercier Charlie)

私たちは、トマ、コリーヌ、グレゴワール、そして私（シャルリ）の4人からなる友人グループです（右上写真）。私の義姉コリーヌ（兄と結婚）が、宇陀市菟田野古市場地区で「古民家」を購入し、私たちは彼女の家の修復を手伝っています。2023年8月31日に日本に到着し、多くの作業を行ってきましたが、まだ多くの作業が残っています。これまでに地元の地域活動にも参加させていただきました。菟田野の祭と隣の地区のとんど焼きです。

私たちの日本語は初級レベルですが、日本人の皆さんはとても親切で温かく迎えてくれました。あまり上手に話せなくても、毎回のやり取りが楽しいです。これまで私たちは大阪、東京、そして静岡県下田を訪れました。他にももっと行きたい所はあるのですが、「古民家」の修復は手間と時間がかかります。私個人では、水曜日に出かけて希望する人に英語のレッスンをしています。まだまだ見たいこと、したいことがたくさんあります！



シャルリさんたちは、ワーキングホリデービザで、2023年9月から2024年8月までの1年間、日本に滞在しています。9月にはフランスに帰国しますが、ぜひまた日本に戻ってきたいとのこと。以下はこちらからのメールでの質問とそれに対するシャルリさんの回答です。スペースの関係で日本語訳のみ掲載します。（編集部）

(1) 日本に来てから、日本や奈良で発見したことを教えてください。

最初の発見は家の近くにある「水分（みくまり）神社」です。このような寺社はフランスでは非常に珍しいので、その建築様式に驚きました。田舎の町も発見でした。フランスとはだいぶ異なりますが、とても美しいです。

(2) どんな日本料理が好きですか？

日本のお米は私が今まで食べた中で最高です。お米はフランスにもありますが、それほどではありません。他に「揚げ物」（豚カツ、唐揚げ、コロッケ）はご馳走です！ 焼肉のお肉もとても美味しく、繊維が柔らかく美味です。

(3) 奈良県に滞在中にどんなことがしたいですか？

奈良の町に行ったら、鹿を間近で見たいです。私は動物がとても好きです。野生の動物を間近で見られたら嬉しいです！

(4) 日本とフランスのもっとも大きな違いはどんなことですか？

近隣の人たちへの敬意でしょうか。日本人は控えめで清潔で、お互いをとても尊重しています。フランスでは人々は騒々しくあまり清潔ではありません。あまり礼儀正しくありません。



## 2023 年奈良再訪

ピエール・シルヴェストリ

Environ quatre années... Soit 1 460 jours ou encore 35 000 heures... Plus de 2 000 000 de minutes ou de 126 000 000 de secondes... Autrement dit, un gouffre temporel... Le désastre du covid-19 étant passé par là, voilà le temps qu'il aura fallu pour que je puisse retourner au Japon. J'ai été ainsi tenu éloigné du grand amour géographique de ma vie : 奈良.

L'une de mes deux muses se nomme Nara. Elle m'a tant apporté en faisant de moi un véritable homme lorsque j'avais la trentaine. Le travail dans les rizières m'a transformé. En refoulant son sol en septembre 2023, mes sens en action ont instantanément réveillé en moi des kyrielles de sensations agréables et des souvenirs en pagaille m'ont envahi. Des foules d'images, de sons et d'odeurs me sont revenues en mémoire.

Revoir mes amis japonais tout comme des membres du ciné-club de Nara, pour qui j'ai donné une conférence sur le cinéma français, m'a apporté énormément de joie et de plaisir. Je me suis encore plus rendu compte à quel point les gens me témoignaient de leur affection.

Pour moi, Nara restera à jamais synonyme de bain de jouvence. Lorsque j'y séjourne, je ressens quantité d'émotions. Tout me semble possible, c'est pourquoi la créativité se réactive et se déploie. Mon regard retrouve de la virginité qui me permet de trouver des idées de plans cinématographiques. Mon ouïe et ma plume se réaffûtent. L'inspiration a donc refait surface. En un mois, j'ai écrit les paroles qui constitueront un album de musique pop. J'ai également filmé à l'aurore et au crépuscule dans de nombreux lieux qui me sont chers pour réaliser des vidéos.

Les deux dernières journées de mon séjour, début octobre de l'an passé, j'ai été traversé par une forme de nostalgie mêlée de tristesse à l'idée de retourner en France. Nara me procure toujours un sentiment de déjà-vu. J'y ai habité pendant près de dix ans, mais j'ai l'impression d'y avoir vécu dans une autre vie. Tout me semble familier : les gens et leur art de vivre, la lumière, les couleurs, l'environnement sonore, les parfums... Nara, je t'aime.

(Pierre Sylvestri)

約4年...つまり1,460日、または35,000時間...2,000,000分または1億2,600,000秒以上...つまり時間の断裂.. コロナ禍が過ぎ去り、日本に戻ってこられるまでにそれくらいの時間がかかりました。私の人生の大いなる地理上の恋人「奈良」から遠ざけられていたのです。

私の二人のミュージズのひとりには奈良という名前です。彼女は30代の私を本物の男にし、たくさんのことを得させてくれました。田圃での仕事が変わったのです。2023年9月にその土に戻ると、即座に生きた五感が多く心地よい感覚を私の内に呼び覚まし、混乱した様々な記憶がなだれこんで、たくさんの映像・音・匂いが記憶に蘇りました。

フランス映画に関する講演をし、シネクラブのメンバーのような日本の友人たちとの再会は大きな喜びと楽しみをもたらしました。どれほど愛情を示してくれているか実感しました。

私にとって奈良はいつまでも若返りの泉であり続けるでしょう。そこにいるといろんな感情が湧いてきます。すべてが可能に思え、創造力が再活性化され広がります。目は純真さを取り戻し映画のショットのアイデアを見つけることができ、聴覚とペンは研ぎ澄まされます。そうしてインスピレーションが湧き上がりました。一か月のうちにポップミュージックのアルバムを構成する歌詞を書きあげました。ビデオ作成のため、たくさんの大事な場所で夜明けと夕暮れに撮影しました。

滞在の最後の2日間、昨年10月初め、フランスに戻ると思うと悲しみのまじる郷愁に襲われました。奈良はいつも私に見覚えのある感覚をもたらします。10年近く住んでいたのですが、別の人生を過ごしたような気がします。人々やその生き方・光・色・音環境・香りなど、すべてが馴染みのあるものに思えます... 奈良、私はあなたを愛しています。



## フランス活花グループとの交流

大西 弘 (おおにし ひろし)

私は定年後 20 数年間、国際交流活動に深く関わって来た関係で、世界中の数え切れないほど多くの人達との出会いがありました。その中でもフランス南部の **Mont de Marsan (右地図)** という小さな町で小原流の活花の先生をしている **Josiane** という女性との出会いが私の生涯の友人になるとは予想もしていませんでした。

2003 年 9 月に知人に頼まれて、フランスからの活花グループ 8 名を半日だけ東大寺と法隆寺を案内して頂けないかと依頼を受けたのが最初の出会いでした。JR 奈良駅で 9 時 30 分にお迎えし、東大寺と法隆寺を案内して午後 3 時過ぎに法隆寺駅を出発という超過密スケジュールでしたが、何とか一人で無事に案内を済ませる事が出来ました。その時は、それで終わりだと思っておりましたが、その後思わぬ展開となったのです。

私はその時までには英語での案内にはある程度慣れていたのですがフランス語での案内は初めてだったので、ただ一所懸命にアテンドするので精一杯でした。ところが、帰国後思いもかけず感謝の手紙と共に是非自分達の町に来てほしいと熱心なお誘いを受けたのです。その当時、私達夫婦は昔住んでいたパリとブラッセルの友人達と比較的頻りに連絡を取り合っていた事もあり、3 年後の 2006 年 6 月にパリとブラッセルを訪問した後、思い切って彼らの住む町を訪問する事にしました。ただ一度 4 時間案内しただけの私と妻を彼らは熱烈に歓迎してくれたのです。この時の感激は生涯忘れる事が出来ません。ご主人の **Alain** は町医者で村中の人達から信頼の厚い優しい人で、朝市に連れて行ってくれた時には、会う人毎に日本から来た友人だと紹介してくれました。お陰で市場の人達と仲良くなり、ご近所の人達とも知り合いになる等、その後も行く度毎にご近所の人達が次々と集まって下さって、私達にとってはこの町はすっかり居心地のいい場所になってしまいました。

かくして、私達は **Josiane** と **Alain** 夫妻とは過去 20 年間に 3~4 度訪問し合う仲になりました。彼らは私達夫婦が行けば必ず色んな場所に連れて行ってくれます。例えば 2017 年に奈良から友人二人を連れて行った時には友人達のご近所の友達の家でホームステイさせてもらい、その後 **Josiane** 達のピレネー山脈のスキーリゾートの近くにある彼らの別荘に宿泊し、楽しい思い出深い一泊旅行を経験させてもらいました。このような大都会から遠く離れた田舎町で非日常的な経験をさせて頂ける事は素晴らしいと感じています。

**Mont de Marsan** はフランス南西部の **Land** 県の県庁所在地ながら人口 3 万人の小さな美しい町で、ボルドーからは南に約 130 km、**Nantes** の勅令で名高い **Henri** 四世の生まれた **Pau** の町にはパリから **Pau** 迄飛行機で行き、**Pau** から **Mont de Marsan** までは車で約 1 時間程度です。またパリからボルドー経由で鉄道の旅を楽しむ事も出来ます。

コロナでしばらく交流が途絶えていましたが、2023 年 11 月 15 日から 2 泊 3 日で、久しぶりに **Josiane** が活花グループ一行を引き連れて奈良にやってきました。**Josiane** と **Alain** 夫婦は我が家に、その他の 6 名は夫々フレンドシップ・フォースの会員と奈良日仏協会の会員 (森井桂子さんと山中陽子さん) 宅に 2 日間ホームステイして頂きました。今回は 5 名が初めての訪問でしたので、先ず奈良公園と東大寺を案内し、夜は夫々の家庭で夕食を楽しんで頂きました。翌日は、和束の茶畑と信楽を車 3 台に分かれて案内しましたが、和束に行く途中で浄瑠璃寺に立ち寄ったところ、意外にもこの寺に大感激され、これはちょっとした嬉しいサプライズでした (下写真)。和束はどちらかというと写真スポット的に立ち寄っただけでしたが、信楽では昭和天皇が訪問されたと言う宗陶苑の登り窯を見学後、しばし陶器のショッピングを楽しんで頂きました。その日が最後の夜という事で、一行が我々ホストファミリーに対する感謝を込めて夕食に招待したいと言われ、学園前近くのファミレスをアレンジしたところ、大喜びで大変盛り上がり、是非自分達の町に来てほしいとお誘いを受けました。私達夫婦は翌日京都迄同行し、二条城と錦市場を案内した後、盛岡からジョインされた友人夫妻と共に最後の夕食を共にしました。慌ただしい日程だったので、少々疲れましたが、充実した素晴らしい再会を果たす事が出来た事は望外の喜びでした。奈良でホームステイを引き受けて頂いた皆さんには感謝の気持ちで一杯です。

たった半日の案内からご縁を得て、このような深い交流に繋がっている事に誇りを感じると共に、この出会いを大切に、これからも出来る限り長く交流が続く事を願っています。



## 美術館を巡るフランス旅

村田 京子 (むらた きょうこ)

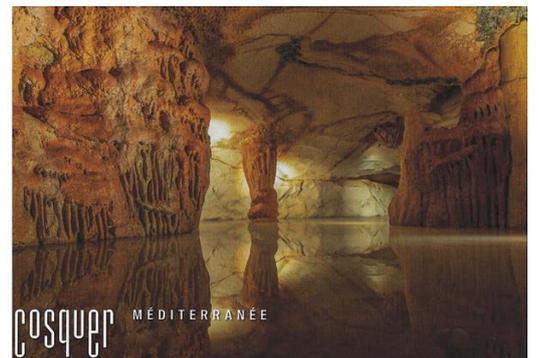
昨年、コロナ禍もほぼ収まったので5年ぶりに渡仏し、9月10日から26日まで、パリの他に南仏を回りました。今回は様々な美術館を訪れましたが、その中でも特に印象に残った美術館を紹介してみたいと思います。

まず、今年のパリでのオリンピック開催にちなんで、スポーツウェアの特別展が開かれていました。ガリエラ美術館では、**La Mode en mouvement** というタイトルで、18世紀のアンシャン・レジームから現代に至るまでのスポーツウェアが展示されていました。20世紀初頭のサイクリングウェアは、テーラードの上着に半ズボンの組み合わせで、当時は女性がズボンを穿くことに大きな抵抗があり、こうした格好でサイクリングを楽しむ女性は、石を投げられました。装飾芸術美術館でも **Mode et Sport** というタイトルで、古代ギリシアから現代に至るまでのスポーツウェアが展示されていました。女性用乗馬服（アマゾン）やテニス・スキーウェアが並んでいましたが、とりわけ目を引いたのは、20世紀初頭の水着（**右写真**）でした。セーラー服のような赤い水着は、まさにブルーストの小説に出てくるリゾート地の女性たちの姿を彷彿とさせます。また、フランス革命の一コマを描いたダヴィッドの《ジュエ・ド・ポーム場の誓い》(1791) で有名な **jeu de paume** はテニスの元型です。もともとは「手のひら」でボールを打っていたのが、グローブをはめるようになり、最後にはラケットに代わります。その経緯がわかるような展示で、さらに、映画『クレヴの奥方』(1961) でこの球戯に興じる貴族たちの場面が壁に映し出されていて、なかなか面白い企画でした。



ニースではシャガール美術館、マティス美術館を訪れ、マティスが設計したヴァンスのロザリオ礼拝堂にも寄りました。礼拝堂のステンドグラスは鮮やかな青・緑・黄色から成り、外は雨で薄暗いのに明るい陽光が射し込んでいるような印象を受けました。祭服「カズラ」も青一色、赤一色の生地に白の大きな模様の入った斬新なもので、青い空の似合う南仏にぴったりのイメージでした。ニース近代・現代美術館では、ヌーヴォー・レアリズムの作品が多く展示されていましたが、何といてもニキ・ド・サンファルの作品に圧倒されました。彼女は女の豊満な肉体を賛美し、その逞しさが溢れ出る作品を世に出しています。その躍動感、見ている者にも心躍るような感覚を与え、男の眼を通した美しさよりも、女性自らの美しさを探求した芸術家と言えるでしょう。

マルセイユでは、開館したばかりのコスケール博物館を訪れました。1985年にダイバーのアンリ・コスケールがマルセイユ近郊の海で水中洞窟を発見し、そこには先史時代の動物の絵などの壁画があったのです。その壁画を正確に模写したレプリカを使って水中洞窟を再現したのがこの博物館（**右写真**）です。中に入るとまず、遊園地のように6人乗りのカートに乗り、ヘッドフォンをつけて解説を聞きながら洞窟をゆっくり回りますが、解説の場所になると動物の場所が光って見える仕組みです。馬、野牛、巨大なシカ科のメガロケロスなどの絵が浮かび上がってきますが、ペンギンが喧嘩している絵もあって、マルセイユにもペンギンがいたようです。先史時代にタイムスリップしたような気になりました。



帰国前夜には、パリのパレ・ロワイヤル劇場で『エドモン』を見てきました。この劇場は、17世紀にリシュリュエー枢機卿が建立し、モリエールの芝居もここで演じられました（1784年に建て替え）。こうしたクラシックな劇場で演じられたのが、『シラノ・ド・ベルジュラック』の作者エドモン・ロスタンが主人公の芝居で、この作品を書き上げるまでの彼の苦悩が喜劇タッチで描かれています。オフエンバックのフレンチ・カンカンやサラ・ベルナルも登場し、19世紀末のパリの雰囲気盛り込まれていました。芝居の初めから終わりまで爆笑の渦で、モリエール賞を5つ受賞しているのも頷けます。

他にもアルルのリュマ美術館などを訪れ、個性的な現代アートに触れましたが、痛感したのは、文化事業や若い芸術家への支援にフランス政府が積極的に関わっていることで、文化大国を謳う日本も見習って欲しいものです。

## 仏学始祖・村上英俊と以前以後 白鳥 保二(しらとり やすじ)

Mon Nara 10月号の樋口順一さんの記事「江戸時代における海外言語コミュニケーション」に、オランダ人ドゥーフについてフランス語を学んだ長崎通詞の本木正栄のことが紹介されていました。私も幕末の日仏交流に関心があり、「仏学始祖」と呼ばれる村上英俊のことが気になって、彼の生涯と事績について調べてみました。

村上英俊は1811(文化8)年、下野国(現在の栃木県)で医師の家に生まれました。本木正栄らが幕府の命令でフランス後を学び始める1808(文化5)年の3年後です。11歳の時、父とともに江戸に出て10代から蘭学を学び始めます。1841(天保12)年、姉が藩主真田氏の妻妾だった由縁により信州松代に移住。1848(嘉永1)年、ベルセリウスの化学書(火薬製造について著述有り)を翻訳しようとして、オランダ語版ではなくフランス語版が届いたことがきっかけで、フランス語の学習を始めます。このフランス語学習は、松代藩士の佐久間象山の勧めによるものと言われていますが、ベルセリウスの本を翻訳しようとしたのが、自身の発案か、佐久間象山に依頼されたのかは、研究者によって見解が異なります。



ペリー来航翌年の1854(嘉永7)年、フランス語・英語・ドイツ語の対照辞書『三語便覧』を刊行し、その後もフランス語学習書や様々な辞書を編纂します。このころから、宣教師メルメ・カションなどフランス人の来日が増えてきます。1855年安政に改元され幕末の動乱期に入ります。1861(文久1)年、幕府の蕃書調所(ばんしょしらべしよ:その後、洋書調所、開成所と改名され、現在の東京大学に繋がっていく)の教授に就任します。

1864(元治1)年、日本最初の本格的な仏和辞典ともいわれる『仏語明要』を刊行。この前後には、フランス人によるフランス語学校なども開設され、お雇い外国人としてのフランス人が活躍し始め、外国への使節派遣や留学生も送り出されるようになっていきます。1865(慶應1)年、福地源一郎が幕府使節として渡欧し、フランス語を学び、翌年1866(慶應2)年、江戸に英仏語塾を開設します。

1867(慶應3)年幕府の職を辞し、1868(明治1)年、東京に私塾「達理堂(たつりどう)」を開塾。多くの塾生を抱え門人帖記載人数429人を数えました。その中には榎本武揚、加太邦憲、浜尾新、中江篤助(兆民)など、明治に活躍した多くの人材がいました。講義内容としては、フランス語学習だけでなく、化学や歴史も含まれていました。明治3年には『西洋史記』という翻訳書を刊行しました。

明治10年、「達理堂」閉塾。中江兆民が入塾後ほどなくして退塾したのは、村上英俊の講義に飽き足らず、放蕩的な生活をして、村上英俊から破門されたともいわれています(幸徳秋水『兆民先生』)。ほかの塾生たちも、箕作麟祥の塾やフランス人が開いた塾、官立の学問所などの他の塾に去っていきました。村上英俊のフランス語に満足できなかった者がだんだんと増えていったためといわれています。特に発音に関しては、オランダ語風の発音で、直にフランス人に接して得たものではなかったようです。閉塾後はラジウム製造などで生計を立てました。

明治18年、日本人として初めて、レジオン・ドヌール・シュバリエ賞を受賞。明治19年、「仏学会」創立に関わり名誉会員となり、明治23年に78歳で逝去しました。

さて、フランス人と接した日本人を含め、フランスと日本の関わりをみてみると、幕末期をはるかに遡り、ザビエルの来日の頃から始まっています。ザビエルはバスク地方の人でした。江戸中期には、新井白石がヨハン・シドッチを尋問した記録「西洋紀聞」に、フランスのことが触れられています。18世紀末江戸時代の漂流民大黒屋光太夫は、ロシアでフランス人旅行家ジャン・レセップス(F.レセップスの叔父)と偶然会っており、レセップスは「旅行日記」の中で、光太夫の人間的魅力を書いています。19世紀に入ると、押し寄せる外国との交渉で長崎のオランダ通詞たちがフランス語学習を始めます。樋口さんが紹介された本木正栄などです。ただし、本木正栄の事績と村上英俊を繋ぐものはありません。蘭通詞という特殊技能集団と各地の蘭学者の系譜は異なっているようです。

19世紀以後、幕府にとって、国防が重大案件となり、外国事情や科学技術習得が課題となり、外国語の学習はその要望に沿ったものとなります。村上英俊もその時代の人であり、時代の要請に沿って、フランス語を学習・翻訳・教授していました。しかし、明治時代になると、直接フランス人に接する新しい人達、フランス留学から帰ってきた人たちにとって代わられていくこととなります。科学知識だけでなく、社会情勢や文学、思想面の導入が始まり、英俊のフランス学に飽き足らなくなっていく世代が出現してきます。

村上英俊は、いったんは忘れられた人となってしまったようですが、時代の制約があったとは言え、フランス語の普及に関しての彼の功績は忘れられてはならないと思われます。なぜ彼は幕府の職を辞した後、明治政府に登用されなかったのか、或いは、仕えようとしなかったのか? 福沢諭吉のような痩せ我慢の思いがあったのか、又は、もはや自分の出る幕ではないと思ったのか、機会があれば、調べてみたいと思います。

### 父の取材旅行

知念 宏司 (ちねん こうじ)

私の父・知念正文(1935-2014)は主に二紀会で活動した洋画家で、父親(筆者の祖父)の故郷沖縄を描くことをライフワークにしていたが、ヨーロッパ取材旅行も数度行っており、フランスには1984年・2001年・2007年の3回訪れている。2001年と2007年には私も同行した。

1984年の旅行で訪れたフランスの街はパリだけだったが、ここでスリに遭った話はよく聞かされた。到着して物価が高めであると感じて10万円程度両替した後子供たちに取り囲まれ、何だろうと思っていると突然、蜘蛛の子を散らすようにいなくなり、気づくと財布がなくなっていたという。直後にパリ在住の日本人版画家を訪ねると「その程度で済んでよかったですか。100万とか盗られてる人もいますよ」と慰められたそうだ。21世紀の今、この手の物盗りは激減したと思うが。

あとの2回は訪問地も半分ぐらいは私が決めた。2001年にパリ以外で訪れた主な街は、アルル、ロカマドゥール、サンテミリオン、シノン、ディジョン、アヌシー。2007年は、リヨン、ボヌ、ルーアン、ジヴェルニー、オンフルール、ナンシー、ストラスブール等。ワイン産地が多いのは私の趣味だが、田舎の方が断然面白いはず、という考えで、ワインをキーワードにしたところもある。

父の風景画制作のスタイルはこうだった。鉛筆でスケッチを行ない、水彩で着色する。帰宅してからそれをもとに油彩画に仕上げるのだ。観光地でスケッチをしていると、必ず通りがかりの観光客が覗きにくる(右写真)。この点、欧米人は遠慮がないようだ。尤も腕は達者だから見られて恥ずかしいという感覚はなかったに違いない。

2001年にアルルを訪れているが、ここはゴッホゆかりの地ということで、父がぜひ行きたいという希望を持っていたのだ。ゴッホが入院していた病院跡などを見て回ったが、気温は36度まで上昇し、暑くて大変だったことを覚えている。アルルといえば、ドーデの『アルルの女』に登場する闘技場もぜひ見ておきたいと思っていた。闘技場そばの日陰で父はスケッチをし、私は清涼飲料水を口にしながら景色を眺めていた。ふと見ると、ゴッホの絵画『黄色い家』そっくりの建物が目に入った。土産物屋らしく、その名もLa Maison Jaune(右写真)だ。早速入ってみた。ゴッホの絵のことを話すと店主の返事がまた振るっていた、「これは複製だ」。確かにゴッホの描いた黄色い家は現存しないのだ。

2007年の旅行でも大画家ゆかりの地を訪ねている。それはモネが居を構えたジヴェルニーだ。前夜は隣町ヴェルノンにある個人経営の小さな宿に宿泊し、翌朝、宿の主人に車でジヴェルニーまで送ってもらった。その際、村にはレストランが一軒あるから、そこでの昼食後、宿に電話してくれれば迎えに来る、と告げられた。訪れたのは2月、モネの家をはじめとする観光施設はどこも閉まっていた、このノルマンディーの小村は閑散としていた。教会を少し見学し、その後大半の時間、父はスケッチをしていた。そして昼になって問題発生。教えられたレストランが休業しているではないか。周囲には誰もいなくて困ってしまったが、ようやく通りがかった地元の人を捕まえて事情を説明した。親切にもその人は近くの建物のドアホンを押して話をしてくれ、宿に連絡がついて無事帰り着くことができた。

同じ旅行で、私が途中体調を崩した日があった。直前にノルマンディーで食した海産物のどれかが原因と思われるが、その日はパリからシャルトルへ日帰りで向かう予定だった。苦しみながらも予定通り行動したが、駅で列車を待つ間、ベンチにもたれかかるように休んでいると、何とその様子を絵にされてしまった。『駅』と題するその作品(右画像)は、のちに個展の壁面を飾ることとなった。トラブルも題材になるわけだ。この旅の最後に訪れたストラスブールに、私はその後、大学の在外研究で滞在することになる。これも何かの縁だろうか。



ロカマドゥールにて(2001年8月)



アルル闘技場そばの土産物店(当時)  
"La Maison Jaune"



『駅』(2007年作)

## 2024 年は奈良日仏協会創立 30 周年

今年は奈良日仏協会創立 30 周年を迎えます。記念行事として、祝賀会と記念誌発行の二つを実施することになりました。祝賀会は秋に開催する予定です。日程は 3 月の理事会で正式に決定しますので、会員の皆様には「Mon Nara 通信 4 月号」にてお知らせいたします。記念誌は「奈良日仏協会 30 年史」(仮タイトル)を発行する予定です。

当協会の設立は、1994 年 4 月 23 日奈良市「菊水楼」にて行われた発会式に遡ります。その 1 年前の 1993 年 3 月に「奈良日仏協会準備会」が立ち上げられ、現在も活動が継続している「フランス・アラカルト」や「シネクラブ」等の集まりが定期的で開催されるようになりました。「30 年史」では、過去の行事、現在の活動、創設当時のメンバーからの寄稿等を軸にして、当協会の活動の歴史を残せるようにしたいと思います。会員の皆様に寄稿をお願いすることがあるかもしれません。その折にはどうかご協力よろしくお願いたします。(浅井直子)

### 美術クラブ第8回例会『モネー連作の情景』鑑賞会 (3/14)のご案内



- ❖日時：2024年3月14日(木) 13:40~16:30
- ❖会場：大阪中之島美術館
- ❖参加費：会員無料、一般 500 円、展覧会入場チケットは各自購入のこと。
- ❖集合時間・場所：13:40 に美術館 2F チケット売場裏の多目的スペースに集合 (参加者には詳細案内)。鑑賞後の懇談会は大阪大学中之島センター「アゴラ」にて。
- ❖問い合わせと申込先：sugitani@kcn.jp tel. 090-6322-0672 (杉谷) ❖定員：20 名
- ❖2023 年 Mon Nara 通信 12 月号にてご案内しましたように、鑑賞会では、はじめに

ポイントを少し解説し、それから各自自由に鑑賞。その後、感想や意見の交換会を行います。「睡蓮」連作ははじめとして、モネの作品にはすでに出会っておられる方が多いことでしょう。とはいえ、いざ作品の前に立ってみると、それまで気づいていなかったものが鮮明に見えたり、絵から音楽が聞こえてくるような気がしたり、突然インスピレーションがわいてきたりと、何かしらのインパクトがあるのではないのでしょうか。知識は不要です。一枚一枚の絵と虚心に向き合った時に感じられることを大切にしてください。(ナビゲーター：浅井直子)

### 《2023 年度第 6 回理事会報告》…事務局

日時：2024 年 1 月 18 日(木) 15:00~17:00。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、菌田、喜多、杉谷、中辻、高松、藤村、三木。議題 1. 会員数確認。議題 2. 11/16 理事会後の活動：(10/22) ガイドクラブ「会津八一の歌碑をたずねて」、(10/29) 第 61 回シネクラブ例会『ロシュフォールの恋人たち』、(11/23) 秋の教養講座・講師赤木睦代、懇親会「ア・ヴォートル・サンテ」。議題 3. 今後の行事：(2/25) 第 62 回シネクラブ例会『思い出のマルセイユ』、(3/14) 美術クラブ鑑賞会「モネ展」。議題 4. (2/11) 2024 年度総会・懇親会「菜宴」にて。議題 5. 30 周年記念行事：記念式典の開催と記念文集発行。議題 6. Mon Nara 通信 No.17, Mon NaraNo.304 2/19 発送予定。議題 7.その他：次回理事会 3 月 21 日(木) 15:00~16:30「菜宴」にて。



**編集後記** ☆ 最近「冬堇(ふゆすみれ)」という言葉を知りました。冬堇という品種の花は存在しませんが、春を待たずに咲く堇のことをいうそうです。私がこの言葉に出会ったのは、知人が故人を偲んで詠んだ短歌の中でしたが、俳句の冬の季語にもなっていました。☆「親しかった人がいなくなり悲しい気持ちであてもなく寒空の下を歩いていたら敷石のすき間に小さな堇の花が咲いていた」という知人の歌に接して、沈んでいた私の心にも少し温かみがさしてくるような気がしました。☆立春を過ぎて冬から春へと再び季節はめぐりはじめています。堇は万葉時代から歌に詠まれ身近に親しまれてきた花です。夏目漱石が「堇ほどな／小さき人に／生まれたし J'aimeerais renaître / Si c'était possible / Aussi modeste qu'une violette」の俳句を詠んだのは、熊本五高の英語教師をしていた 30 歳頃です。Elizabeth Suetsugu さんの仏訳には「renaître 再び生まれる」という語が用いられています。堇とともに再び生まれる生を想像しながら新しい年の新しい季節を迎えています。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2024 年 6 月号は **5 月 30 日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2 月、6 月、10 月発行) 又は「**Mon Nara 通信**」(4 月、8 月、12 月発行) に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

**Mon Nara** 2024 年 2 月号 numéro 304

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : [nara.afj@gmail.com](mailto:nara.afj@gmail.com) FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司